自　然　科　学

冨田惣七*

もうそろそろ人間の時代も終りに近いらしいのか，人々は一生懸命に，その終焉の日のために努力をおしまないようだ。

〝あとは野となれ山となれ〟という言葉を金科玉條として，大いに自らの最後のために骨身を削って奮闘している。

ある科学者によると，医学，医療科学，薬学は益々進んで，あと半世紀もすると一つのピークに達するだろうという事である。

そして勿論平均寿命はグンとのびるわけだが，丁度それと同じ頃に，地球上の緑は三分の一位になっていて，人間の視力や呼吸器官に新しい問題が発生するだろうと述べている。

× × ×

緑の地表を削って新幹線を走らせたという事は，土地の用途に変化を与えた，というだけの問題ではなくて，地表と人間の生存との間には，有機的な，極めて微妙で複雑な，絶対的な結びつきがあるので，だから地表を失った事が，人間の未来にどんな答えとして返ってくるかという事は，本当は，東海沖地震のように……かも知れない，という類の予測の問題ではなくて，自分の頬を自分の指で抓ねると同様な，覿面な問題なのである。

× × ×

7年程前，日本へ観光旅行に来たアメリカ人が，帰国後〝ふじやま〟などについての印象を尋ねられた折，〝ふじやまは臭い山であった〟と話したということが，当時日本の雑誌にも紹介された事があるが，これなどは近い未来に対する一つの予見でもあるようだ。

× × ×

空カン公害などと騒いでいるけれども，こんなのはまだまだ可愛らしいことで，これからは，とてもそんな程度のことでは済まないよ，とある評論家は謂う。

今でもすでにそうであるが，空地があったら，すぐそこはテレビや冷暖房機の古型品の山ができ，更にその山を高くするべく自動車や電算器がどんどん積みあげられるだろう。

勿論今の観光地というようなものも，その頃には，不用品の廃棄指定地になっているだろうという事である。

つまり，〝国立公園〟とは呼ばないで〝国立廃棄場〟と呼ぶわけである。

× × ×

だって〝再生する〟という事だってあるではないか。そういう方面もすばらしい発達を遂げている筈だ。と考える向きもあるけれども，ある学者の研究によれば，残念ながらどのようなシステム

＊福井市照手1丁目2－9

に依っても，そのために要するエネルギーは，人類の生活形態とそのテンポに必要なものを遙かに越えてしまうので，── 生きることを断念する程度の〝ぎせい〟を払わない限り，そういう希望は全くもてないだろう，とすこぶる悲観的な展望である。

× × ×

〝未来学〟というものが提唱されて，梅棹忠夫とか加藤秀俊とか小松左京とかの，そうそうたる学者，評論家が〝人間の脳がもつ可能性〟とか〝資源とエネルギーの未来〟とか〝人口論からみた未来社会〟とかの研究が大いになされたけれども，しかしこの先生方も，何か今では〝もう匙を投げた〟というようなところが見える。

× × ×

獣医学者笠井千石先生は ── 欲望を満たすための科学の〝便利さ〟だけを考えて，その〝害〟に目を向けなかった〝とがめ〟を，これから人間は背負のである ── と謂われ，又 ── 最後に生き残って笑うのはゴキブリ類であろう ── とされている。

ゴキブリがどんな顔で笑うかは別として，〝進歩〟というものの〝正体〟を本気でみつめることを怠けた罰は，絶対にのがれる事ができないようである。

× × ×

〝地球の健康を考えて，自転の速度に合わせましょう〟というフリーライター高木裕女史の叫びは，世の人々には，可細い女の呟き位にしか届かないかも知れないが，しかし言ってみればこういうのを〝天の声〟とでも謂うのであろう。

〝天の声〟などと言うと，何だ非科学的な，とかたづけるかも知れないが，どっこいそういう人達こそ早々と片づけられるのである。

× × ×

もう手遅れかも知れないが，科学，科学と，何とかの一つ憶えのように，安易な調子でまくしたてるのは，もうこの辺でよしにしたらどうだろう。

いくら力んで試験管ベビーを作ってみても，それはやがて人間が，生殖作業をやめるかも知れないという前提とはならないのだ。

そう言うと，いやそれは優生学上の何とかかんとか，生命のどうとかこうとか，と素人には分らないむずかしい事を申されるけれども，然しつまるところそれはプロビジョンの問題ではなかろうか。

又，極く精選された少量の，又はそれに代わる薬物を摂ることで食生活に革命をおこすことになるかも知れないが，だからと言って，胃や腸はもうどうでもよろしい，舌が味をみる仕事はもうおしまい，という未来を確約するわけでもない。

すばらしい変転自在の歩行機が発明されたとしても，だからもう足は切ってもよろしい，とはいかないのである。

× × ×

ちょっとやそっとで，人間が，動物の分類上にもっている名称を変更しなければならないような事態は起こらないのである。

× × ×

さて，としたらわれわれは，何をしたらよいのであろうか。

博物館は，何を，どうしたらよいのであろうか。

ともあれ，取り敢えず，私達自身が自然そのものであって，一匹の虫と自分との間，一輪の花と君との間には，根底的には全く何の相違もないのだという視点に立って，〝大きい〟〝永い〟神秘と謂う以外にどう言いようもないこの自然の悠遠さを，もう一度〝しっかり〟見すえる事かも知れない。

何をするかの具体的問題は，それからあとの事かも知れません。